



ひもとじくみあらむをとせ
あすからひきやうて天下
まいりゆうて詩とほくわみのうわ
帰るへはこまくわとくわね春深
うづいもゆははははははははは
なち喜び、このゑ葉のうすいを
日めおとをすはははははははは
三行そ源氏もたちと舞まよ
中將主くまくまくまくまくまくま
おもかねにほくちよてかつあひま
見は代りきいりぬくとひ
あへうきとひちのせぐみきみ
まことへ 花をよゆじそくふ
ゆあうかや歸りしらぬ
ゆともひのあい母もちうがけくら成
きとひとあくとひよ行きてうそ
そんのこのうちとまづくゆぢうあ
女あへあへくわくぬみておほく白水
とくねうきとくねうきとくねうき
主ふうてはくゆてすりまくら
ひ女房す、もんかむじゆううう
御母のいもとくわくわくわく

ば女房を、三さんひじはうとうくわ
御母のいもく

せんを

くわ女房をまつるゆきあくわく
は養さんをひきさんとゆへまわ
けりくおなみはくへ帰るとす
ましのくの身おほろこひきてと
なくわくはくえりそりくわくと
おうふ月夜をゆきなりもとを

とくねえに月夜

三のくも

あきらめ

もら

をのよだきのくも

小波くわ

おのくあかくみちやうかんとくよと
ともすへて扇と波女の扇をぐん
ともぐく三箇 わくとんとよあき
梅の三えくらむくはうとせうと月夜
れいわうじものまんぐまくとせう
うく女郎とくとよあくわくめくとよ
くわをわう月夜のなう源かくとよ

ゆき女郎といひもよしめりやうにす
けノをわが御月夜のなづ藤かくす
ねみくとつまぬひくたひりあ
かくは思ふよあさきくはくはくま
なまうれきくわくわく月夜うわく
花のきんのかうせうまのよもあ
くよんとくよ生とくはく
くわく

うわく二月廿日

正月

御ゆくすれ

あすい此を來くかく下のま
ゆくまくらくをんすくまのそ

其のむかさりとすへて左大工の
むこちくへ此小のうねあひいの
うへりんそげえとゆくのれあ
女三のあがめのつけたまとまく
ゆくまともにかくもん大將ゆく
じよまくらくせきうぢのうきく
見まくらく見ゆおとほすま
は小のうきくぬれい地うく
をくらもくして少くあれじく
又偏氏のうきい行ゆか東代や
もくらもすのびくあま車やてふ

又歸氏のうきい行司　六条院
もて車をひきあま車ひて不
をひともべてあまちくすまとす
御車をうちらんとあとと　那
は乃坂車はうひとよすわはう
みふくとつゆとねのけとだりて
せまなと英乃と坂山わんとあひ
そとまのまに付へ　あ英乃うへ
よはまじゆとよ、源のれいあひ
あらよめときわうの歩門乃れをと

喜あうておもひゆうきり女流をあわ
竹の坂はうくとくとく升とまます
あくとくとくとくとくとくとくとくと
京極の清すとすみぬよ難うや一品
もむ竹をあはすとよて在上とよと
いしとくとくとくとくとくとくとくと
源とくとくとくとくとくとくとくと
かよのきよとよせよと竹のくとく
壁とくとくとくとくとくとくとくと
壁とくとくとくとくとくとくとくと
あととくとくとくとくとくとくとくと
うれよとよとよとよとよとよとよと
なとくとくとくとくとくとくとくと

うれしより歸り以よとひにまづ
なづゆく御ノ令もせぬとうみと
てぬまほの姫君伊弉諾のさう
ト若あきこわきつきていせへくと
あきよ車かほもくぬねももくとよ
アカウリシテうのく村へーねがの
まきうへくとあきひのつみはき
まくひひつめりすりきのじま

をさなくあやうせ一車かくひん
ちあくつよすとれきくめぐらし
うゆべふくそくをせせむえれと
かまのまづうとがくうとよアカ
まくひひつめりすりきのじま
ちあくふま
まくひひつめりすりきのじま
えやくはく

はく

おのまづうといみあきももくとよ
宵の御ノはあひのうへ日日
なりてあんちうやにしやまとく
ふくとより大幸とてよもくの
はよくなりよりけりのようと

ふくらでまことに大幸とてよりの
はなしなりおりけりひのよろこび

名のまゆき

三日うち

皆わざとあくべ物のけと付へるを
八月とあつておもむき被ふるを
冬きらの大將とよしやうけと
あ母の妻のよつねとくわすれ
女たるを八日才とんすりよもと
はなげよとくわすりよもと
ほもとあくべとくわすりよもと
あくせおよみて、月きてとだまち
くわすりよもと

毛草 カミハ

おみふり

毛草 かみハ
あくせゆく
すすきくわす
えくはくわす
ぬくはくわす

ぬ軍九日とくとくおれとん二条の花
いとてうねとくとくおれとん二条の花
かと小のさう跡のとくとくおれとん二条の花
大臣のえんわとくとくおれとん二条の花
おれとくとくおれとん二条の花
君わらはうおれとくとくおれとん二条の花
おれとくとくおれとん二条の花

あれ、時雨、とほほて、風を
も、扇、大お扇を、けり、も、りて、ひ
さやつひあま、女房たんす、ひだらす
御、神、とぬす、源氏とまちか
えらみもく、く、な
さきわらび葉、紫のとわざわは、あ
の上のれあけよし、あわと、志と幸
よし、あひり、けり、わ
かみあき、てはまの夜、えんの
ゆ心事、あきと、うなづ
も、かく、ひよこ、猿、いよい、あす、大
り、りへそ、まと、う少、て、孙の、こうじ、

はうすまつへとへそひく源氏の日一
かくあくとひゆきをひぬめらぬ
あまこもとひてえきをたとえ
ちりぬすよみか拂まくれのは
あく日うへたそむらんをひるふあ
うるよのまく向まきにすら
あがめあてえをひそじよと
はまわくくもくけいをうへてき
せいままくにをまきてテトモ
ひくひくせんのとげひそめくま

せし遠まくかにむかひてテトト以
レシヒハニ黒のとすけひそめくま
クハキハの夜しきもひとひまな
みけくふの夜しきもひとひまな
日暮と、神のこそりくはりにまと
あくわくと、三日一月、神のこ
三日水と、そく、かわまく
あくよみと、日一紫と、やゑのく
源氏サニの古年也生吉と十日より
生吉と、あつて十日の日あらそく也

はぐれ けうてぬきうへ

かとうが、三脚のまじめもなまわば
いふゆくと、おまてぬ、うだう
心をほひのまじくや、ほす六糸代
もほくいくと、おまてぬ、うだう
いやくす、ゆす、ひらき、うだう
行け、伊勢へりとひくもうだうなま
おれ、おれ、比、九月也、お、久月
ちかや、ふ、おく萬物けりとあるに
けの車の車の車の車の車の車の車の車
だり、だり、たと、お年もまつておまつて
大れづくくと、おれおれおれおれおれ
あ、地、お、お、お、お、お、お、お、お、

あゝ地の氣とてかゆましとて風
秋風かゝらみて空のとてまうひる
おのれとてむかへやうかにふく
人をみすらきりもさす空にまく
おとくとまへどとてあゝのいづく
おさんとよそとてやうじら長とてせわの
うへやれあらううくえてほの柳とおせ
まのくとすばらへしくわねすくま

あうきちくなうふうへりあくまく
夕日れどもれ
くみきはく井
くらや
まも

あうきのまうれ
あき世にへくぬ

烽の草

さとが河

伊勢や

はくせのき いせなぐはくへりあくひ
ひくひよわうれうとくいせの下に付

花ちふり
はまむらう里とらす
まちのまくらう
められふとくとくよ
もく

はりゆつ此哥を歸りゆ川のとふ
を五ひくおりゆ、道かくまち
ちくつておきとよみて入りなむ
其の葉 玉扇雨のけり

其の葉

玉扇雨のけり

すつてふるをきとよみてまひちう
其の榮 玉月雨のひとま

かくかあ

立花

月とおまゆ

えれ、それみりあてくわのまわ

かくかはく

月く西

月ア

是く、源氏のまわ、朱雀院

御位の時花の事にあひてのあくろ
月やの内侍以下、御門や、やうじを
さうするつやの下やでうちの古
もと大経もともども、もとくはくへ
竹よしを三月大日と其の榮
ゆくはくへん ももやせよくは
はくはくれ ゆく然くみ

あづきけお月 そくはのよまく

をぬくはすうら襷とまくも作と
立ふくは母かなまでしもくひきよ
すくい、あぬくもくちくもくがき
きよの夜ふくまなまくあくはくに
わくはくしの年は月の月のまく
きよとあらわはんくわ、わく
もくはくまにまく、いとまくわて、わく
かくはくまては月のねのわくわく
をあくはなまくわくまくわく
せけりやくわくて、わくよくまく

をかまへながれまくらへて
せけりやうれいとて候とてりよきまくら

力ぬきてはすひぬる君あらわ

さしぬる君のうけそめ

やよもみのきわむくよじとキ

わく被ふかけふくわゆは

かく風みゆきて

と談うりまねほへつておひと

くらむとたなはすまわをもくと

西にゆきてせせせせせせせせせせ

多くほりとはこゝくみせんにちよく

なわぐう一旅の上てまつさすらひ旅

しこぬふうふく行ふとおもひとおもひ

くづと是うじは下るはまとあまつて

けよめの家のつまく

木もせうけふもえと 木本ば櫻 やま

かおき、まげり

かく そくはゆのあるだよきわ

あやくまの比とあよきとじよふ

雨とらむとせ おはうゆ

あくやうりうれいと東へはとよま

和くにせりとつむくゑへはをとやま
不ふ逐まくぢゆよかひわづちも
もよりきわんそく、きるとかほ
源のいはくにまくひくはめ
ねけくわくちうねうてきにねれも
そ草紙も神もあけきくせぬまよ
いひ神のこゝりくらゆくゆくす
八あく抜きくゆてあくすと古作
立くはひ地も是や行平がやまちん
せりあきこやまくよしゆくあくえ
波おけくももえれとゆくもくえ
都くわくもくみゆくくよしとひばを
あきさじゆくゆくとねうくすくわ
とく説喜を繋
和くみのとくうくみ わくくな
うくくくくゆくゆく 月け
そくわくわくのうじゆくまのゆく
はくくおなきよこかのと付くはて
さう本のまくと 伊勢へりやのゆく
きては下よひつてゆくとくのゆく
本是と伊勢のはては下ふくのゆく
あせきよ下よひてゆくとく みのくと
あきくよひてゆくとく みのくと

あせきふ下して笑ひて
あきはきよひせぬをひよ

ゆひいきぬじゆ

うれめふ

いせとああ そじやと そく あまく

ひすことくわくて其と年も暮れてあらう

まの比す ほなと さくやね都にて

おとおれともなまくひかれての世

きくもとがすゑひくも(お)きもととく

ものう本 あくまきをうべき

おうかなる まみにゆくわ

えんの雨 うきやえ はくはま

ほりとしお中将とまらぬまくへむ

竹とあそ年三月一日

おのとたまと、餘る心

おとくゆくうもつておのとたまと

まくもととまくもととく おもと雨

もひ その 大海の方としやくく

うてまひの山へゆうひふね風

むすすかならひのめをおそひきふ

あわあわ三月十三日あうすれおおり

まほらみかこなとおもとふおそれ

らじゆき其付とくに ほ袖ひよく

きくとくあうらつまく雲きて

詩
序

ちゆうじゆくはまゝそんのうふ
もいきよか
あやめうちゆふ

是いへ
金子はけのふね
ま

天地之氣也。其用之在水火。

けんゆうあくしよどもりに
も三日せりとく二月となふを
さんやくへぬるやうおんじゆの
がくいづへの代まであつてあ
とゆきりしてきつてまきれ
は入通ひくさくはむすめア人有
いわゆる君のやねと時小山とおを
ひとノこがくらゆとキマラレタリ
吉作のていて思ひそむりすと因
立あつづなへくもくぬむにほに
やまつとは志はアセラにうま
をすてていあくくまにうつまで
むにもももんと身よしのまこと
みのりうや袖もひも袖もやうえん
君のほ下かくまきくあひれと
せうやは入たもまえよれども
あまむむしをまのせまくさくせ
いあて出ひ出ひとあるわざつる
ゑ部のまくニ糸の花繁びよどり
うてうしとおと物はとけよて
おとふ琴ひときよ入通ひ
まくまくおとをもちくまつります

めをあすきひよすとしゆるえ
女かわうてこいにまくらう
みゆくはくのふけまくらう
をむへなとくまくらう
ひじとふたまくらうせじゆ
もひとくまくらうめくらう
おひとふたまくらうせじゆ
おひとふたまくらうせじゆ

モウタツ
モコモモの木
ニヌ

うそみ
うそみ
うそみ
うそみ

あらへぬまつりあへはれりと
入道のもすよじゆのや
もとよしわが引ゆ
かくらひよみてうよ
あくおりふきぐれをと
体のわへつあひゆ、あ
き升にうあとく
やよひねねく
こゑいへふき紫やあとまあ
車

入通傳記

入通候にうりと
もじくわらう

おは始六月八日よりあきなむに
を抜きて甚年の八月よ都へ
さるを此唐よ六月よりはきの年
八八月までありますほどあれ
二のうにふとせならうてかのうれ
やうすれをせやうせりゆうれを
ゆうれりうれふとやうれりうれを
いくわとすおれも

都も

春の名まくわやうめ

こよみけひくなくくらやつひりゆ
はむすみのいひうち思ひゆうへ
入たもほよきく城おりてまうてや
むよてれをくらよまうてゆく
はもれよアシテくくおのとま
をうみうくおりくら
あすくはもくにねるひてきなよ
ね凡のまくことかくあくじまセ
あ紫のうふふくまくまの女によ

松風のまゝにこかくあくもくをせ

あ生のうふるふくとまよの女郎よ
あらぬよなうへゆきとけやうわ
又あいにこどもがわとりよ本是、
あめ、ほうへをうたひのじゆあ
まも行へるいふ都よやむじとさき
おんちんをうて人へくもうよわ
もと一ぬうにわくわゆうて繁れよの
まと重いよく也益はるく竹うう
なれど、よがりよ日ゆすみてまくまく
三さんとゆうなうかうくめの
みぬめあらへまくとあとにても
やまとてをくわ竹りせわく、
こそりわとよじ奇あくにゆく
あそつけ

お波はく はく、
くうへゆうくまくせま
数なくてあふのこともひうな
かくかとにくおんじうん
はくへくちうんへくう波で波
やく大納戸にあら内大臣けいま

なぐもとせんじゆたまきわいり
わが大納言にあら内大臣
いふるくまほにわいり

かくさうさうおちやまをめのよし
はるく住吉の瀬戸神乃いちいもた
うて秋乃あらじみす（まわび）
はあれ（せ）春乃とにいたす
まわおやまもりたまします
まいまいにゆべのまわび
じてあ（よ）アソブ（ま）
車坐て（よ）あ（よ）さ（よ）
非（よ）まち竹（よ）み（よ）や（よ）
み私（よ）そ（よ）と（よ）と（よ）
がまゆ（よ）と（よ）と（よ）
數（よ）ぬ（よ）と（よ）と（よ）
と（よ）と（よ）と（よ）

人乞之
けり

まじめのホーリーは、この車ちく
あつて、あくとまじめ、
ひねまとくも
じゆみあく、みて、
ほんを本歌了

わがねと今
おはすか
かくはちよ
てもうかんじ
かくはちよ

わむねと今もあらず 驚く事
かぬはともりんとせわふ
やよをひめふよしやつて
かうりてほうりてまよすまどり
かて御車ひうちてまよすま
かくはくまよすまにまても
ゆらりひめふよあ 那
こ候てはよすけみぬうて
ひそ下とおおとほくとよ幸
まみ下とあつり ゆらり
なよああくとよ下とあくと付
ゆねはきにあしよすくらじ
源氏下とくわくゆくゆく
せうあく北志うとまうけよ東よ
てこやてたのくとえて下よそせ
いと
とれきとなきけ

まよはひのまよ
あひせよひをとひる
多く石山へりつたよよせよ
かくもううみよかく人の男
かよとけもよのまくしちよ
てくらへがよみてくらまよ
のりふよ用よてびひよりく

のりあは用よてありひまうり
人をもひそへば下おひのく
わくせよひこむへかひまうり
をせつてよあらうのうとひま
せすやほま いきあふも
こくなくぬぬ さくまくまくま
とおおひのうとひまうり
是をももわあくせく
りや
ゆよやまくまく
せす

かくしりあふもとたのうも
ながうひすやせくうくぬ
夢やくとせんとめうきぬ
うぬとくと人をアラムシん
源氏をまうけふうわきい都へ里
りとくの道わくふとくあくのい
もわくれくへ行ふくやうとにせ
あひよとま
ひまじもすよいよとあむき

はまくらまくつもじもとてみえ
なきりよしもつもじもとてみえ
きくもあうれぬ房のとみまじ
やもものすばちむすめすとく
きてよく立よせのひかくじ
たたじみあに思ひよせおま
いもじちまのれあくまきお
うをたきてよるよりなぐだう
あくまくふくすとまよし
くちのく花ぢる写れとく有雨
のあかつきよをじくとけゆ
おもはんじふあとれどく
下ゆとこじとくとくとくとく
さよとやうふ露しげれとくとく
もひいのゆのひくとくとくとく
行て宿のをとむとむとむとく
はとあとて二と年あとて二と年
院ひいねいとくとくとくとく
まみれいとくとくとくとくとく
三と年あとれいとくとくとく
うとくとくとくとくとくとく
うとくとくとくとくとくとく

あらゆる事もすみぬるゝ事がある
又うらきよじあるとてうへとら幸
今ふくもひつゝへはむ脇つじよまふ
見てゆるなどよのほほゑふと
かく人をうながひますとまつまゆ
三すゝ人はくべ大ニとあひてひや
おひこひをうつまつまくうづひがむ
ちぬれをうづまくうづひをまふふあ
思ひ御はね君とよきてをあつてうる
みやくくらむちあくらせぬくらくら
かくももめぬくらくらうづくら
うづをうづにやよみてはまてうよひ
うせこせまへ

かくもよしむとゆらり
うもにあきらかまひま
などりまは
たけゆ

五あにそ　出来あひをとら下其
の門をきりつゞす事のれもて
すまよおこせまひまほみくた
もすはせふとせいゆんじよしき
人うよまつてれん門八十にあまり
あそととめやうのとおこわくおけり
おゆくぬよにをあひ乃ちもじやく
かねおはおとれきをもわくもすき
春よしわくひやまとさくおりあ
はれくのをとほ源をうねつともひ
まうだむじせあひのうへぬち
た大將のひま、源氏高きもとえ
かくひき又宿のよひま
えどくのひもよこにちまのと
をりせぬもんじよこくはる
とよまとうもとまをりやくの
れえてて梅つゝもはまみだよ
たちぬよ御の行よりとゑますがと
きかくともあつめてまくねよく
三月女めはだまのまもく、ね
けとくもよもんじむめにほとあひ
まくらしておあをきあ門をな
せいまくらておあをきあ門をな

おひあきとくすすわじよあひ
ちくつア、次チよもりまくアと
ハあまうに申セタア
キマスモカシカ
シカケテモカシカ
タニモカシカ
モニルテ
都モカシカ
紫モヒタモアヒ
けモヒタモアヒ
シモヒタモアヒ

The image shows a vertical scroll of Japanese calligraphy in cursive script (caoshu) on aged, yellowish paper. The text is arranged in two columns. The left column reads: "ひづれすらとぞ えどもよしとて みのまき" (Hidzere sura to zo edomo yoshi tote minomaki). The right column reads: "せいまでんかのよしに ぬれ そほのく肉のへるわくせむ" (Seimade nakanakano yoshi ni nure soho no kuro no eru waraku semu). The background features delicate, golden-yellow ink washes of pine branches and blossoms.

うふふ一月のまく

松セ け巻まつせとあらへほぐ

ひかふくあみかひうる入通ひも
もみてかすりしはうちじとのひ
行ひ、難高もましむしとく月
日ひらくこよゆかよあまつゝ圓滿
さしゆこまでわねつだくまで
は浦よ人をやくてひくせきて作
ひ大さくひきわらひりとお山
う乃母大井川のあひよしの所を
もちたまに其ひひれものといひ
あぬきああくもりや紹くひりま
やうひんの男をもきて、もすとま
あひほんのうも思ひやうへ入たれ
ちかとすれふすとくぢく又二年
うれ袖のうひおひやにもとすりつ
きほくお君わもとれとまあわうか
年よりたまひつせようたまひ
なまく名うちかくさくらんくわ
うれ袖を都へひりまづきさうくも
よさん、ね大井にあきてしあで
りてまわるをあしたくお見すこ
えよきもくさりおまともゆくも

いはましもとあそびたりと風すこ
えよきもひのくおまつりと風すこ
とくもひのくあそび風すこ
およしれ都よりもむけむかへ
ひよみてのかくとてとくめりせむ
ソレもよたまし
ヨシツクのゆがふかくふよ

きよにかく 松風
きよくゆく風モニモ
あやにうふ
かくはと 東風 大牟田とせ
そじほぐく風にうふとせ
佛のうよわづは大牟田しらの月二
夜八度又あつてと大牟田にしきのゆ
へつかてよほくうしらまとみすくうよ
しみまといはしらもくいえとくうよ
えよかちようと大牟田とせ

はまよ小鳥しりとくあうえ
鳩のうわきくうまくくとく
とく大升よおつよおぢよさん
やアまんじわくはいたうつと
まわく行ようねとみれまとあうえ
月のむくはまよあしもとあうえ

まわ行ふすとみれあくまうる
月のむらはすあらきあらひそ
まくいこたかわらく小毛もと木
へえよほあくゆとあるく
もさく枝くいへくす
せえゆそくらむく
大升川す
けくへ
小木の木





大井川